

1 主題設定の理由

今年度担当している1年生は、発言も多く、口頭練習にもしっかりと取り組むことができる。しかし、会話活動は一問一答になっていて、しばらくすると沈黙になってしまったり、相手の意見に対する賛成・反対などの意思表示ができていなかったりする。1学期の目標として、ALTと1分間会話することを目標に会話練習を行ってきた。資料1は、1学期末に実施したアンケートである。「1学期を通して、自分の考えや意見を英語で相手に話したり、伝えたりすることはできるようになりましたか」

5. 1学期を通して、自分の考えや意見を英語で相手に話したり、伝えたりすることはできるようになりましたか。(speaking)
とても話せるようになった... 5 まあまあ話せるようになった... 4 ふつう... 3 あまり話せない... 2 話せない... 1 *

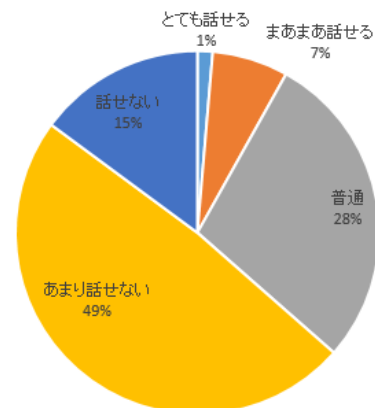
と尋ねたところ、資料2のように、全体の約6割の生徒が「あまり話せない」「話せない」と回答した。また、「今、あなたが英語に関して、不安

☆☆☆☆

7. 今、あなたが英語に関して、不安に感じていることを教えてください。(どんなことでも構いません) *

回答を入力してください

【資料1】 1学期期末に実施したアンケート



【資料2】 アンケートの結果

に感じていることを教えてください」という質問に対し、生徒からは、「流暢に話すことができないから相手に伝わるか心配」「発音を間違えて別の意味として相手に伝わっていないか」「書いてある文章を読んで理解することはできるけど、会話では自分の言いたいことをうまく伝えたり、相手の言っていることを理解することができない」など英語の発音に対する不安や自分のコミュニケーション能力に対する自信のなさを感じていたりする生徒が多くいた。実際に、生徒の活動においても、want to と want の発音が区別されていなかったり、No, I am.とよく考えずに答えたりする生徒も見られた。1学期末から継続している帯活動「Small Talk」で、仲間と毎回一つのテーマについて会話する活動を行っている。この活動においても、生徒の会話は途切れ、相手の発言に対して適切な反応ができず、消極的な取組になっていた。そこで相手を意識し、伝わりやすい英語を考え、自分の考えや思いを相手に伝えることができる生徒の育成を目指すことにした。その過程で、本研究では一人一台用意されたタブレット端末の録画機能を使用し、生徒自身が英語の発音や話している時の様子を振り返ったり、改善点に気付いたりすることで、コミュニケーション力をさらに高めることができると考えた。

以上のことから、「仲間との関わり合いを通して、自分の考えや思いを伝えることができる生徒の育成 一英語科中学1年生「A Speech about My Classmate」の実践を通して一」という研究主題を設定し、実践に取り組むことにした。

2 研究の構想

(1) 目指す生徒像

本研究では、目指す生徒像を次のように設定した。

- ① 相手を意識してより伝わりやすい英語を追究する生徒
- ② 仲間同士の学習活動によって互いのコミュニケーション能力を高め、「振り返り」を通して表現力を磨くことができる生徒
- ③ 英語で自らの考えや思いを相手に伝えようとする生徒

(2) 研究の仮説と具体的な手だて

目指す生徒像を踏まえ、本研究の仮説と手だてを次のように考えた。

仮説Ⅰ：目指す生徒像①に対する仮説

授業内でICTの活用方法を工夫すれば、相手を意識してより伝わりやすい英語を追究することができるだろう。

① 手だてⅠ：授業内におけるICTの活用方法の工夫

ア 相手に正しい発音、流暢なスピーチが言えるようにする場の設定

1学期末に実施したアンケートから、「流暢に発音することができないから相手に伝わるか心配」「発音を間違えて別の意味として相手に伝わってしまわないか」と答える生徒がいた。タブレット端末のディクテーション機能を活用すれば、一人一人がタブレット端末のマイクに向かって教科書本文を音読し、正しい発音として認識されるかを確認することができる。タブレット端末を使えば、生徒の主体性や個々のペースに応じた学習が可能になり、相手を意識してより伝わりやすい英語を追究することができるだろう。

仮説Ⅱ：目指す生徒像②に対する仮説

仲間同士で教え合う場の設定を工夫すれば、互いに学び合うことによって、コミュニケーション能力を高め、「振り返り」を通して表現力を磨くことができるだろう。

② 手だてⅡ：仲間同士で教え合う場や自分の表現を振り返る場の設定の工夫

ア 自らが発表している様子を動画で撮影し、振り返る場

Unit 6のUnit Activity「A Speech about My Classmate」の様子を録画し、動画で振り返りを行う。タブレット端末を使用することで、自分自身と仲間の表現方法や会話の内容を客観的に振り返ることができる。このように、仲間同士や自己を振り返る場を設けることで、表現力を高め合えるようになるだろう。

イ 作成した作品を互いに見合い、アドバイスし合う場

作成した作品を授業支援ソフト「SKY MENU」で回収し、生徒が仲間の作品を自由に閲覧できるようにする。紙媒体で、クラスの生徒全員が作品を発表したり、互いに読み合ったりすることは時間を要するが、グループワーク機能を使用することで、クラスの全生徒の意見を聞いたり、仲間のよい表現を知ったり、仲間からのアドバイスを作品に書き込むことなどが容易になる。この活動によって、自分自身のよい点や改善点に気づき、互いに

フィードバックすることで、よりよい英語表現へと高めることができるだろう。

仮説Ⅲ：目指す生徒像③に対する仮説

生徒に主体的に英語表現を考える場を設定すれば、相手に自分の考えや思いを英語で伝えようとするだろう。

③ 手だてⅢ：生徒が主体的に英語表現を考える場の工夫

ア 英語でどのように言ったらよいか分からない単語や表現を集め、共有する場

「A Speech about My Classmate」を作成する際に、未習の単語や表現によって生徒の英語表現が制限されないように生徒にタブレット端末の辞書機能を使って、分からない単語や表現を調べさせる。その後、クラスで協力し合いながら共有し合う場を設ける。生徒自身が必要であると思った表現を共有することで、自らの考えや思いを英語で伝えるための力を伸ばすことができるだろう。

イ 即興的に質問したり応答したりすることができる会話力を高める場の設定

一つのテーマについて深く掘り下げる会話活動「Small Talk」で既習表現を使って英語で相手に質問をすることに慣れさせる。疑問詞を使った会話練習を重ねることによって疑問文とその応答文を習得させ、即興的な英会話力を高めることができるようになるだろう。

ウ 定型文を活用して自身の英語表現へと発展させ、会話に応用する場の設定

教科書の本文を活用して他己紹介の仕方を学習後、登場人物になりきって家族紹介を練習することで、実際に仲間を紹介するときに必要な表現を知り、更に発展的な表現を取り入れることができるようになるだろう。

(3) 抽出生徒(生徒A)の実態と期待する姿

生徒Aの英語力は、1年生全体の中では中位で、英語に対する苦手意識は低い。文章を読み取ったり聞き取ったりすることは得意であるが、自分の考えや思いを言葉にしたり、英語で話したり書いたりすることは苦手である。特に、仲間と協力して学習をすることが苦手であり、一人で学習をしようとする傾向にある。

今回の「A Speech about My Classmate」を通して、自分の考えや思いを仲間と協力して英語で書いたり話したりする経験を味わうことを通して、英語で伝えられたという喜びを味わわせ、「もっと英語で話せるようになりたい」という気持ちをもたせることによって、コミュニケーション能力の向上を図りたい。またコミュニケーションをとることが苦手な生徒Aの実態から、「A Speech about My Classmate」の過程で行われる仲間との協働学習の意義にも気付かせたい。

(4) 単元構想表

単元名：A Speech about My Classmate (11時間完了)		
時	生徒の学習活動	指導上の留意点

1	・三人称単数現在形の文法を学習する ・クラスの仲間を紹介する文章を考える	・教科書の本文を通して、友達を紹介する際に必要な英語表現を学習させ、更に発展的な表現を交えながら、他己紹介文を作る場の設定をする。(手だてⅢウ)
1	・教科書本文の内容を通して、登場人物になりきり、他己紹介を練習する	・既習事項も交えながら、三単現の「s」を使って他己紹介文を作成できるように、生徒が教科書を復習したり、教科書本文を参考にどうしたら仲間に正しく伝えられるか試行錯誤する場を設定する。(手だてⅢウ)
1	・三人称単数現在形の否定文を学習する ・クラスの仲間を紹介する文章を考える	・仲間のことを正確に他者に伝えられるように、既習内容を活用し、会話練習をしたり、どんな質問ができるのか、Small Talk で会話するときどんな工夫ができるかを考える場を設ける。(手だてⅢイ)
1	・会話活動を通して、クラスの仲間の情報を集める	・ Small Talk や教科書の既習表現を使って、英語で質問し、紹介する相手のことを知る場を設ける。
3	・教科書本文を用いながら、英語が正しく発音できているかを確認する	・タブレット端末のディクテーション機能を活用して一人一人がタブレット端末のマイクに教科書本文を音読し、正しい発音として認識されるかを確認する場を設ける。(手だてⅠア)
1	・「A Speech about My Classmate」1回目の発表 ・英語で質問したり、英語表現できなかったことをクラスで共有したりする	・他己紹介を行い、発表者に対して即興で質問し、積極的なコミュニケーション活動ができるよう発表の場を設ける。(手だてⅢウ) ・クラス全員から相手に質問できなかった表現を集め、会話活動や作品の中で必要だと思う表現を取り入れる場を設ける。(手だてⅢア)
2	・「A Speech about My Classmate」の動画を見て振り返りをする ・SKY MENU によるフィードバック活動を行う	・仲間の発表や自身の発表の様子を動画で視聴し、仲間の表現方法に着目をしたり、自分自身のよい点や改善点に目を向けたりする場を設ける。(手だてⅡア) ・完成した作品を SKY MENU で閲覧できるようにし、互いの作品にアドバイスや感想を書き込むことで、英語における学習活動の効果を高められるようにする。(手だてⅡイ)

1	・「A Speech about My Classmate」2回目の発表	・2回目の他己紹介を行い、発表者に対して即興で質問し、活発的なコミュニケーション活動になるように発表の場を設ける。
---	--------------------------------------	---

3 研究の実践と考察

(1) 定型文の活用から英語表現を適宜選択し、仲間と会話する生徒

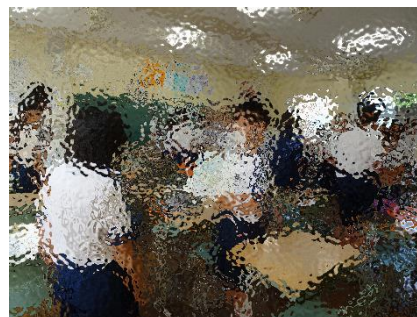
「A Speech about My Classmate」に向けて、教科書の本文を通して、どんな英語表現を活用するとクラスの仲間を紹介できるかを学習するところから始めた。まず、教科書本文のピクチャーカードを使用し、英語を用いて登場人物の他己紹介を教師が行った。資料3に示した文章は、教師が生徒に紹介した実際の文章である。

【資料3】生徒に紹介した他己紹介文

Hello, everyone. Look at this picture. This is Takuya, my brother. He's twenty years old. He lives in Cebu, the Philippines. He studies English at a language school there.

He meets many Asian students at school. Takuya goes to school on weekdays, and sometimes enjoys scuba diving on weekends. Cebu has many beautiful beaches. He and his friends go diving together. He really likes Cebu.

教師の発表後、生徒は他己紹介について聞き取れた内容を、周りの仲間と共有した。するとさまざまな情報を共有していく中で生徒Aは、「動詞の後ろの形が変わっている」と三人称単数現在形の用法に気付いた内容の会話をしていた。実際に教科書本文を使って音読練習をすると、生徒Aは、「Helloと挨拶されたら、Helloって返した方がいいね」と言い、仲間同士で練習する際に自然な会話にしようと心がけていた。生徒Aのパートナーである生徒Bは、「もし発表相手の紹介文が聞き取れなかった時、何とさえいいんだろう。」と悩んでいた。生徒Aは、Small Talk内で学習した「Pardon?」をペアの生徒Bに伝え、実際のスピーチで聞き直したい場面を想定し、「Pardon?」を使って、他己紹介の練習をしていた。



【資料4】教科書を使った
他己紹介の練習の様子

音読活動を通して生徒自身に新出事項に気付かせることをねらいとしたため、三人称単数現在形について前もって解説しなかった。すると生徒Aは、「主語がheやsheの時は動詞にsが付く」や「doesn'tは本文の意味からするとnoの意味なのかな」と発言し、板書による学習ではなく、教科書本文の音読と英単語の形から推測することができた。生徒Aには授業の振り返りとして、パートナーについて英作文させた。生徒Aが書いた英作文が資料5である。

【資料5】生徒Aが書いた英作文

She is 生徒B
生徒B dont stady Japanese.
She likes science and history.



【資料6】生徒Aが書いた英作文

She is 生徒B
She doesn't study Japanese.
But likes science and history

単元始めに書いた資料5の英作文では、代名詞がうまく使えていないことや、三単現の否定文の用法を用いて英作文ができていないことが分かる。単にペアである生徒Bの情報を英語で書いたように思える。しかし資料6では、「doesn't」が使えていたり、「But」を用いて仲間の情報を際立たせようとする工夫が見られた。

「A Speech about My Classmate」に向けて、教科書本文を活用して他己紹介の仕方を学習していく中で、実際に仲間を紹介するときに必要な表現を知る場を設定したことは、自らの考えや思いを相手に伝えようとする手だてとして有効であった。

(2) ディクテーション機能を用いて正しい音で相手に伝えようとする生徒

授業の中で、文書作成ソフトのディクテーション機能を活用し、正しい発音で英文が読めているかどうかを確認する活動を継続して行った。音読する文章は、教科書本文を使用した。資料7に示すのが、1回目のディクテーションにより作成された文書である。文書作成ソフトは単語のスペルが

John yoga dancing. thank you. I agonizing funny dance together. no
thank you. no thank you dancing you say you can't do it.
OK. Boo I'm hungry. is something hello yes Silva could I noodles.
that's a good idea. I like sassy too. I need some juice.

【資料7】 初回のディクテーション記録

間違っていたり、英語を書くときの決まりができていなかったりする場合、文字の下に青色の波線が引かれる。今回の「話す」活動においてだけではなく、「書く」活動においても文書作成ソフトの活用は、非常に有効的であることが確認できた。資料5では正しい文章として成り立っている箇所は少ない。資料8は、4時間目に行ったディクテーション結果である。

What is the Google? Inc Japanese clothing store. eating up a lot of western
crazy high throws. the Parma years only to promise. sounds interesting. pause
show in Missouri for next Sunday. why don't we go together? Sure. see speak
he has old English or Japanese? see usually speak English but see sometimes
speak Japanese. Great.

【資料8】 4時間目に行ったディクテーション記録

使用した本文は同じである。資料8には、「see」と文字化されているが、生徒Aは、「she」と発音したつもりだった。授業で聞いた発音をそのまま自分で発音した結果であるが、ディクテーション機能により、生徒Aは「sh」の発音がうまくできていないことが浮き彫りとなった。資料9は、その後さらに音読練習を重ね、8時間目に行ったディクテーションの結果である。

What is a Google? eats Japanese comic storytelling, a performer or a Christian praise different lawyers, drop Homer uses only two props up front and a hand towel, sounds interesting. Diane Keaton has a show in middle hall next Sunday, why don't we go together? Sure, which does she speak in partial English or Japanese? she usually speaks English but she sometimes Japanese. Great. ♪ ※二重線は、筆者が引いたものである。

【資料 9】 8 時間目に行ったディクテーション記録

二重下線部は、前回のディクテーションよりも教科書の本文通りに文字に起こされた英単語である。前回と比較すると、正確な発音で英文を読めていることが分かる。「eats」と出ている箇所は、「It's」が正しく入る英単語である。資料 8 と同様、曖昧にしてきた発音の部分が明確になった。学習した三単現の「s」の発音がしっかりと文字化されていることは、動詞に「s」が付いたときの発音が理解できていることを示し、生徒 A の成長の証である。資料 10 は単元末に行ったディクテーション活動の記録である。

What is not Google? it's Japanese comic story telling, up a formal friends different roles, the performer uses only two props a fan and a hand towel, sounds interesting. Diane Keaton has a show in middle horse next Sunday, why don't we go together? Sure, which does she speak in Herschel English or Japanese? she usually speaks english but she sometimes speaks Japanese. ♪

【資料 10】 単元末に行ったディクテーション記録

生徒 A のディクテーション記録を見ていくと、二重線の箇所は少ないものの、前回のディクテーション結果から更に読み取られる英単語が増えていることが分かる。生徒 A が音読練習を積み重ねた結果であると感じた。また、ディクテーションを通して、固有名詞が読み取られにくいことも分かった。また文章の中で出てくる単語の中に、大文字になる英単語、そうならない単語があることが識別されていない。今後も文書作成機能の活用方法について検討し、さらに有益な活用方法を模索していきたいと考える。資料 11 は、生徒 A によるディクテーション活動を通しての振り返りである。

発音や単語をいかにききとれないと、タブレットにききとれなかったり、声のボリュームもいかにききとれなかったりするの、このディクテーションは人と話すときに大事な要点をおさえていかにききとれないと、人と同様に他の言葉に聞こえてしまったり、ききとれな場合と同じだと思えたので、とても実用性のあることを学べるんだなと思いました。

【資料 11】 ディクテーション活動を通しての生徒 A の振り返り

生徒もこの活動を通して生徒 A は資料 11 のように、声の大きさや明確に発音に気付いたり、正しくディクテーションされなかった時は、聞き手に対しても誤って伝わってしまった可能性があることにも気付いていることが分かる。タブレット端末のディクテーション機能を活用し一人一人がタブレット端末のマイクに向かって教科書本文を音読し、正しい発音として認識されるかを確認する場を設定したことで、正しい発音で相手に伝えたいという意欲を引き出し、英語で話す際に意識すべきポイントに気付かせること

ができた。授業内でのICTの活用を工夫したことは、相手を意識してより伝わりやすい英語を追究する手だてとして有効であった。

(3) 「A Speech about My Classmate」を発表する生徒

1回目の「A Speech about My Classmate」を発表する日を迎えた。近くの仲間で4人グループをつくり、仲間の他己紹介を行った。また発表のルールとして、発表後、必ず質問をすることを定めた。前時までに学習したことを生かし、発表後の会話活動が活発に行われるよう工夫した。またグループ内の仲間が動画を撮影し、発表後、振り返りができるようにした。生徒は思い思いに練習してきた仲間の紹介を始めた。発表する過程で、生徒Aは教科書の表現で学習した文頭の挨拶表現や、スピーチを締めくくる表現を使って発表を行っていた。しかし、質問の時間になると、英語で質問できなかったり、応答の仕方が分からず黙ってしまったりすることが度々見られた。資料12は生徒Aのグループで行われた会話の様子である。

【資料12】生徒Aのグループの会話記録

- A : Hello, everyone. Look at this picture.
He is 生徒B . He is twelve years old. He lives in Matuzaka town. He has cat. He likes red, green, and blue. He likes sports, watching trains, and riding trains. He join the soccer team.
Thank you for listening. Do you have any questions?
- C : ... Yes. What food doesn't he?
- A : I don't know.
- D : Yes. Does he like soccer?
- A : Yes, I do.
- B,C,D : ?
- A : Sorry, sorry.

生徒Aに対して、生徒Cが質問したとき、紹介した生徒Bのことが分からず、沈黙してしまった。前時までで、三単現の「s」を活用した文章は書けていたものの、会話活動になった途端、三単現の疑問文に対して正しく答えられていないことが分かった。質問の答えを知らない時、どのように対応すべきかを準備すべきだったということが課題として残った。また発表の内容について即興的に質問して発表内容を広めることができず、目指す生徒像とはほど遠い結果となった。会話記録からは、三単現の疑問詞 Does~?を用いた質問を正しく発話できなかったことも分かった。一方で生徒Aのグループの生徒の様子を見ると、質問をしようと挑戦する姿や言いたくても言いたいことがなかなか出てこず、もどかしい表情をしている姿も見られた。また下線で引いた単語に関しては、生徒Aがよりよい表現を求め、教科書やインターネットで検索した表現である。2つ以上のことを言う

とき、コンマを使用したり、プレゼンテーションのマナーとして「Thank you for listening」と言って締めくくったりなどして、生徒 A なりに工夫したスピーチとなった。資料 13 は、「A Speech about My Classmate」の発表後に書いた生徒 A の振り返りである。

聞きやすいように はきはきと 言ったり、タブレットに 絵や写真があるから 自分がタブレットの画面をまじと見ろのではなく、相手に見せろということも大切だと思いました。さらにタブレットの画面をさきでなぞりつつ紹介しているのを見て、とてもわかりやすかった。なので、タブレットだけでは相手のことのしつものときにあまり 話題が広がらなかったのでも、質問がしたくなる 紹介のしがたを したいです。

【資料 13】「A Speech about My Classmate」発表後の生徒 A の振り返り

「A Speech about My Classmate」1 回目の発表を終え、仲間の紹介を見た際に「タブレットの画面を指しながら紹介しているのを見て、とてもわかりやすかった」と書いており、2 回目の自分の発表に取り入れようとしていることが分かる。また、質問時に話題が広がらなかったことから、自分の紹介文にも目を向け、質問したくなるような発表にしようと、よりよい英語表現や発表方法を考えようとしていることが分かった。また、資料 14 は、活動後生徒 A が英語で質問できなかったことを振り返りに書いたものである。

兄弟はいますか。
なぜそれが好きなのですか。(理由)
A と B ではどちらのほうがいいですか。

【資料 14】 生徒 A が英語では言えなかった質問

仲間の発表の中で、家族についてや「なぜ」や「どちら」といった未習の疑問詞を使用することで、もっと相手のことを知り、内容のある会話にしたいという意欲がうかがえた。1 回目の発表を通して、生徒 A があらかじめ作成した英文を読むことはできたものの、発表の中で聞き手に質問したり、答えたりするといった即興的な力が不足していることが分かった。未習の表現も使用しながら、予想される質問や相手の応答に対する準備をし、2 回目の発表では自身の考えや思いを伝えられるよう工夫していく必要があると考えた。

(4) タブレット端末の活用を通して、自分自身を振り返る生徒

前時に行った「A Speech about My Classmate」の発表の様子を、写真のようにタブレット端末を使用し振り返りをした。一人一台タブレット端末がある学習環境を生かし、ボタン一つで動画が撮影でき、すぐに見ることができる機能を活用することを計画した。撮影されることに慣れていない生徒 A であったが、動画を見ているうちに自身の姿に見入っていた。資料 15 は、発表している様子の動画を見て、生徒 A が書いた振り返りである。

タブレットをよもみている表情が、声も通りにくいので、私と聞き手を
見たほうがよかったのと、タブレットが地味に自分よりなっていることで、
相手に見えているつもりでも思っているのと違う感じになっていることが多いと
思ったので思っているよりもたいていに行けたらいいのかなと思っていました。

【資料 15】 動画を閲覧した後の生徒 A の振り返り

「表情がみえず、声も通りにくい」や「聞き手を見たほうがよかった」と自分が予想していたよりも相手に伝えようとする声量、姿勢ができていなかったことに気付いた。それを踏まえ生徒 A は、「大胆に行動したらいいのかな」と感想を述べ、客観的に自分の発表の様子を観察でき、2 回目の発表に向けての注意すべきポイントに気付くことができた。

次に「A Speech about My Classmate」の発表に向けて作成した原稿を、仲間同士で相互評価し合う場を設けた。資料 16 は、生徒 A がペアの生徒 B について書いた紹介文に仲

He is 生徒 B

ビリオドがない

He is twenty yeayfs old.

yearfeじゃなくてyears

He lives in Matuzakatown.

He has cat.

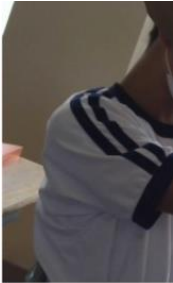
He likes red grren and blue.

He likes sports.watching trains and riding trains

↑ watching ↑ h

He join the soccerteam

ビリオドがない



間が書き込みをしたものがある。生徒 A の文章中に数カ所、スペルの過ちや英語の文章を書くときのルールに沿って英作文できていない箇所が見られる。生徒 A が作成の過程で気付かなかった間違いに対し、仲間へ書き込みをしてもらうことで、より正しい表現を相手に伝えられていることが分かる。今までは紙面を使った活動が多かったため、仲間全員の作品に対して評価をすることは難しかったが、

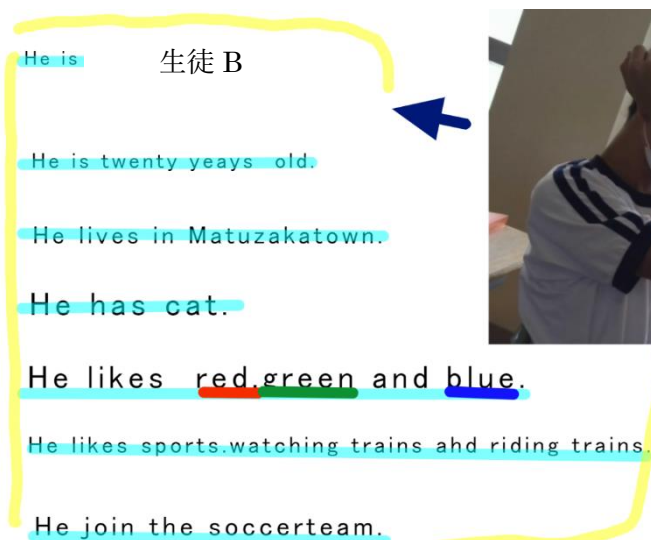
【資料 16】 生徒 A の書いた他己紹介文

SKY MENU を活用することで、自席で移動せずにたくさんの作品に触れられることが可能になり、高い学習効果が得られた。資料 17 は、生徒 A が書き込み活動後に書いた振り返りである。

ビリオドやスペルの間違いは、こうあり、全体的に気がつきにくいところにある印象がありました。また、イラストやカラフルに線が引かれて見やすく明るい印象も与えました。それとは逆に色がなかったり、背景色も統一されて見やすくなると思います。内容だけでなく、見た目が大事ということがありました。

【資料 17】 生徒 A の振り返り

資料 17 のように仲間へ気付いてもらうことで、自分の英語表現を正そうとする姿勢を見せられている。また紹介文のレイアウトにも着目をし、紹介する際、見やすくなるよう工夫することにも関心を引くことができる要因の一つと気付いている。実際に資料 18 に示すのが、生徒 A が作った 2 回目の原稿である。仲間へ指摘された英単語のスペルを直すこと



【資料 18】 完成した他己紹介文

ができていることが分かる。‘years’や‘and’のスペルミスに気付いておらず、正しい綴り英文のルールが守れていなかった箇所も残っているが、仲間同士で作品を確認し合い、意見を自由に書き込みできることは、生徒の英語表現を高める上で有効であることが分かった。仲間の発表や自身の発表の様子を動画で視聴し、仲間の表現方法に着目したり、互いの作品にアドバイスや感想を書き込んだりする場を設定したことで、英語

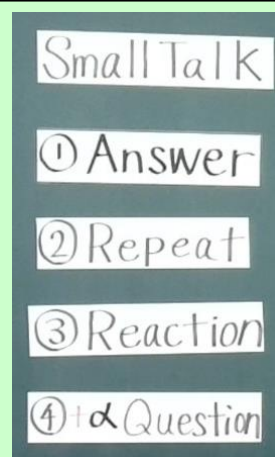
における学習活動を高める手だてとして有効であったと考える。

(5) 再度「A Speech about My Classmate」を発表する生徒

「A Speech about My Classmate」の発表では、発表後に生徒が発表者に対して質問をする場を設けることとした。それに向け、生徒がクラスメートについて聞きたい質問ができるよう、1学期末から帯活動として Small Talk を実施した。既習の表現を加え、p. 8 の資料 12 のように、生徒が言えなかった質問を授業内で共有し、それを活用した会話活動を行った。「What kind of ~?」、「What's your favorite ~?」といった未習の表現を使ってコミュニケーション活動をする生徒から、これまでの Small Talk とは違い、未習表現も積極的に会話に取り入れようとする姿を見ることができた。資料 19 は生徒 A が実際に会話した内容の一部である。

【資料 19】 Small Talk における生徒 A の会話記録

- A : Do you like singing?
 B : Yes, I do.
 A : Oh... You like singing. Sounds nice.
What kind of music do you like?
 B : I like J-POP.
 A : Me, too. What's your favorite song?
 B : I like 'Niji'.
How about you?
 A : I like 'Marigold'.
 B : Oh~.



【資料 20】

Small Talk の流れ

Small Talk では、資料 20 で示したような手順に沿って練習を行った。資料 19 の下線部

は資料 20 の②、③の成果が出ている証拠である。②に関しては相手の答えた質問を確認する表現であり、③は仲間の答えに対してリアクションすることを意識させた。生徒 A は「music」というテーマに対して仲間と会話を行った。仲間との会話の中で自然なリアクションができていることが分かる。また二重下線部からは、生徒 A が表現できなかった表現を学習し、それを会話活動の中で活用していることが分かる。Small Talk 開始時では 1 分間で 1 題しか相手に質問することができなかった生徒 A も、単元を通して 2 題以上は質問することができるようになった。帯活動を行ったことで、会話の中で瞬時に関連のある質問を取捨選択し、相手に尋ねることができるようになった。資料 21 は、生徒 A のグループで行われた「A Speech about My Classmate」2 回目の発表の様子である。

【資料 21】生徒 A のグループの会話記録

A : Hello, everyone.

B, C, D : Hello.

A : Look at this picture.

He is 生徒 B . He is twelve years old. He lives in Matuzaka town. He has cat. He likes red, green, and blue. He likes sports, watching trains, and riding trains. He join the soccer team. Thank you for listening. Do you have any questions?

C : Yes. Does he favorite sport?

D : What does he favorite sport?

D : What sport does he like?

C, D : Ah~.

A : He likes soccer.

C : You like soccer. Thank you.

D : What color doesn't like?

A : I don't know. What color doesn't like?

D : I don't like black.

C : Which do 生徒 B like , red or green?

B : Well... I like red.

C : What kind of cat does he have?

A : He have zashu.

C : I don't have dog.

D : Me, too.

• 一重線

→自分の聞きたかったことが聞けた箇所

Small Talk の練習の成果

• 二重線

→相手の答えに対してリアクションができた箇所

「Small Talk」や教科書本文の練習を行った成果

二重下線部は、Small Talk で練習してきた疑問文の一例である。既習表現の「what」に

加え、「which」や「what kind of」など未習の表現を活用しながら幅広い内容の会話になっていることが読み取れる。また生徒 C の質問“Does he favorite sport?”に対して、生徒 D は違和感を感じ、自分達の学習してきた表現“What sports does he like?”と言い換え、相手に伝わるように工夫していることが分かる。「Small Talk」での会話練習を継続的に رفتたり、教科書本文の内容を学習し、その中で質問する練習を重ねたりした成果であると考えられる。1 回目の発表時よりも会話が弾み、時間が過ぎてももっと質問したい様子を感じられた。言いたくてもうまく言えなかった表現を共有し、継続的に練習する場や、即興的に質問したり応答したりすることができる会話力を高める場の設定をしたことで、自分の考えや思いを英語で正しく伝える力を育てることに一定の効果をもたらすことができたと考えられる。よって、このような場の設定は手だてとして有効であったと言える。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 相手を意識してより伝わりやすい英語を追究することができた。

タブレット端末のディクテーション機能を活用したことで、生徒が自分自身で正しい発音で話しているかどうかを確認することができた。タブレット端末を用いたことにより、主体的に英語を追究する生徒の主体性や個々のペースに応じた学習が可能になり、更に伝わりやすい表現にするために意欲的に取り組むことができた。

② 仲間同士の学習活動によって互いのコミュニケーション能力を高め、「振り返り」を通して表現力を磨くことができた。

動画で発表の様子を録画し、「振り返り」の場を設定したことで、相手に伝える際に配慮すべきことに気付くことができた。SKY MENU の活用により、仲間からのアドバイスを英語表現に取り入れ、表現力を磨くことができた。

③ 英語で自らの考えや思いを相手に伝えることができた。

Small Talk や教科書の既習事項を使い、英語で質問する経験を積み重ねた結果、相手との会話を通して、疑問文とその応答文の構造を理解し、即興で英語によるやり取りができるようになった。また、会話活動から自分が知らなかった未習表現も学習し、正確な英語で発展的な内容を伝えられるようになった。

(2) 今後の課題

- ・SKY MENU を用いての他己紹介文は、文章中のスペルミス全て正すことができないことが分かった。今後、文書作成ソフト等のスペルチェック機能を活用し、生徒自身が誤りを正せるような手だてを考えていきたい。
 - ・Small Talk 中に英語で言えなかった質問を集め、クラスで共有することができなかった。質問集を作成し、生徒の会話表現を豊かにしていくための手だてを考えていきたい。
- 以上のことを踏まえながら、引き続き本研究を続けていきたいと考える。